

# 26PA-am111

正倉院「雄黄」と鳩毒の関係—正倉院「雄黄」は鳩の卵である  
○船山信次<sup>1</sup>（<sup>1</sup>日本薬大）

【目的】天平勝宝八歳（西暦756年）、光明皇太后により正倉院に聖武天皇遺愛の品々が納められた。その中には60種の薬物もあり、そのリストは『種々薬帳』として残っている。その帳外品に「雄黄（おおう／ゆうおう）」があるが、とくにこのものが卵の形を模していることに興味をいだき、この研究に着手した。

【方法・結果】正倉院「雄黄」は鉱物的には「鶏冠石」であり、その組成は $As_4S_4$ であるという。一方、中国大陸の古典『周礼』には五毒と称された雄黄（＝鶏冠石）や丹砂（硫化水銀）などを素焼きの壺に入れ、三日三晩かけて焼くと白い煙が立ち上るので、この煙で鶏の羽をいぶすとこれが「鳩の羽」となり、さらにこれを酒に浸すと鳩酒となるという記述がある。鶏冠石を焼いて昇華するのは亜砒酸（ $As_2O_3$ ）である。すなわち、鳩の羽とは亜砒酸がまぶされた鶏の羽のことであり、鳩毒＝亜砒酸（正確には三酸化二砒素）である。

【考察】もし、正倉院「雄黄」を焼けば亜砒酸が昇華するはずである。この意味することが、正倉院「雄黄」の形が卵であることと深いかわりがあると考えられる。すなわち、この「卵」を燃やす際に上部に鳥の羽をかければあたかも母鳥が卵を暖め、孵化して鳩が生まれる如き様相となる。かつて正倉院「雄黄」の形は単に美術工芸的な目的であるとされたことがあるが、実際にはこの形状は、正倉院「雄黄」が「鳩の卵」であるというメッセージと考える。なお、かつて、毒鳥が発見されたことにより、「鳩＝実在の鳥である」という説（船山信次、ファルマシア、29巻、1144頁、1993年）も考慮されたが、いくつかの観点から、この可能性は低いと思う。ここに、養老律令（757年施行）にかかげられた毒である、鳩毒・治葛・烏頭・附子のすべてが結論付けられたことになる。